

正論にまさる愛の配慮

I コリント8章1～13節

2021年8月22日

松田 基子 師

主イエス・キリストの御救いを受け、イエス・キリストを私の救い主、私の主とすることは素晴らしいことです。何よりもその存在は、

『神様から罪赦され、神の子の身分が与えられ、神の国に、その名が登録されて、永遠の国籍を天に持つ者となった。』
と言うことです。

しかし、現実には、この目に見える、地上の生活を生き抜いて行かなければなりません。ですから、キリスト者とは、現実の生活と永遠の世界に、

『二重国籍を持つ者』
と言うことが出来るでしょう。そこで起こって来る問題は、

『現実の生活を、如何にして神の国に受け入れられるものに近づけて行く事が出来るか』
と言う難しい問題が起こって来ます。特にキリスト者の少ない異教社会では、社会の生き方と、信仰者の考える生き方のギャップに、キリスト者は悩みます。

いま、学んでいますコリント教会というのは、世俗的な社会の中で、信仰の生き方を考えて、対処していかなければなりませんでした。そのギャップが、とても大きくて、問題の多い教会でした。今朝のコリント I の8章1～13節の問題は、教会内に於ける、社会の生活習慣への対応の仕方です。しかし、その考え方は教会員が皆、同じというわけではありませんでした。そこでは互いを批判してはならず、教会は如何にして、キリストにある、愛の一致を保って行く事が出来るかが、大きな問題でした。

1世紀のコリント教会内に起こった問題と言いますのは、今日の私達とは全く、違った生き方が成されていたので、理解は難しく思われますが、その本質は、今日の私達にも、問題を投げ掛けています。パウロは8章1節で、

「偶像に供えられた肉について言えば、
『我々は皆、知識を持っている』
ということは確かです。ただ、知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。自分は何か知っていると思う人がいたら、その人は、知らねばならぬことをまだ知らないのです。」
と切り出しています。」

明らかに知識と呼べるものをもっている人々がいました。しかし、彼らは、その知識を誇った様です。パウロは、それに対して、
『そんなことは、誇れる事ではない、そもそも彼らは自分の姿がわかっていない。知るべき事を知っていないではないか。』
と問い掛けています。ここで、
『知識を持っている』
と言われている知識とは、どんな知識だったのでしょうか。それは、
『偶像に供えられた肉を、食することをキリスト者として、どう考えるか。』
と言う問題でした。

私たち農耕民族には、馴染みが無いのですが、地中海世界は、古代、狩猟、牧畜が盛んでした。そのために神々に捧げられる供え物は、自ずと動物が多く捧げられました。旧約聖書には、動物犠牲について記されていますが、異教社会に於いても、異教の神々へ沢山の犠牲獣が捧げられました。特にコリント市においては、沢山の神々の神殿がありました。

聖書大辞典によりますと、
「コリントでは地中海世界のあらゆる祭祀が行われ、ローマ、ギリシャの神々(コピトル・カピリトヌス、アフロディテ、アルテミス・エフェシア)、近東の神々(イシス、セラピス、メルカルト、キベレ)、
がそれぞれ、神殿で礼拝された」
と記されています。これらの神殿では、礼拝者が、動物犠牲を献げて、礼拝をしましたが、その後、伴食(はんしょく)と言って、神と共に食することによって、その祝福を受けると言う意味ですが、犠牲に捧げた肉を、調理して食べたのです。神殿には、そのための食堂がありました。

主催者は、結婚式や誕生日、快気祝い等、

家族ばかりではなく、親戚、友人も招待して、神殿の食堂で共に、肉料理を食べました。人々は、ことある毎に、その様にして、神殿での、伴食を楽しんだのでした。しかし、こんなに沢山神殿に捧げられた肉は、当然余ります。コリントの遺跡の図を見ますと、そこには肉の市場が記されています。余った肉は肉の市場で売りましたが、それらは全て神殿に捧げられた後の、お下がりのお肉でした。但し、ユダヤ教の人たちは、自分たちで飼育した家畜を、正式な方法で、食肉にして売っていたそうですが、それは市場の値段よりも、遙かに高いものでした。コリント教会のメンバーは、その多くが貧しくて、そんな肉を買うことは出来ませんでした。また、キリスト者になったからと言って、これまでの親戚や、友人との付き合いを止める訳にはいきませんでした。神殿での伴食は、生活の一部になっていたのです。

そこに、一つの考え方が生まれました。4節に、

「偶像に供えられた肉を食べることについてですが、」

とあります。つまり、教会員のある人々は神殿に捧げられた肉を食べていたということです。彼らはどう言う考えからそういう肉を食べていたのかと言いますと、彼らは確固とした考えを持っていました。それは、パウロ自身の考えでもありました。

「世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています。」

と言っています。偶像と言うのは、人間の欲望の投影で、願いを叶えようと形に表したものです。

偶像について、イザヤ書44章13節には、
「木工は寸法を計り、石筆で図を描き、のみで削り、コンパスで図を描き、人の形に似せ、人間の美しさに似せて作り、神殿に置く。」
15節に、

「木は薪になるもの。人はその一部を取って体を温め、一部を燃やしてパンを焼き、その木で神を造って、それに平伏し、木像に仕立ててそれを拝むのか。」

と問いかけています。

エレミヤ書、51章17～18節には、
「人は皆、愚かで知識に達しえない。金細工人は皆、偶像のゆえに辱められる。鋳造った像は欺きにすぎず、霊を持っていない。彼らは空しく、また嘲られるもの。裁きの時が来れば滅びてしまう。」

とあります。この様に旧約聖書では、特に十戒に於いて、偶像が厳しく禁止されていると共に、全く力の無い、空しい物であると言うことが、徹底的に教えられて来ました。

パウロは律法に熱心でしたから、なおさら偶像の愚かさを知っていました。そして真の神様について5節に、

「現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものがないとしても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。」

と言っています。

パウロはここに、

『万物は神様によって造られ、イエス・キリストによって存在させられている。』

と言うことによって、それ自体は汚れてはいない。ですから、

『偶像に供えたものであっても、偶像自身も無く、供えた肉も、元々神さまによって造られた物だから、汚れてはいない。』

と言う理解を示したのです。

この考えは、基本的には正しい考えです。では、正しい考えだったら、それで良いのでしょうか。パウロは、

『正論が人を苦しめることがある』

と言う事を知っていました。そこで、7節に、

「しかし、この知識が、誰にでもあるわけではありません。」

と言っています。人間はロボットではありませんから、それぞれに感じ方も、また、信じ方も違い、心の強さも弱さもあります。自分が信じている様に、自分が感じているように、同じイエス・キリ

ストを信じているのだから、同じだと考えるのは、大間違いです。

7節には、

「ある人たちは、今までの偶像になじんできた習慣にとらわれて、肉を食べる際に、それが偶像に供えられた肉だということが、念頭から去らず、良心が弱いために汚されるのです。」

とあります。イエス・キリストを信じたからと言って、いっぺんに、

『偶像なんて無いのだ。何の力も無い。』と考えを変えられるかと言うと、そう言う人ばかりではありません。小さい時から、こちらの神殿、あちらの神殿に行って、偶像とは言え、その神を信じて、そこで捧げた肉を、一緒に食べることに依って、その神と共にあると言うことは、もう、その人の身に染みついている事です。頭では、偶像は何の力も無いと分かっているけど、その食卓に着くとき、偶像への恐れと同時に、神様の前に、

『こんなことをしても良いのだろうか』と言う、自責の念にかられるのです。

パウロは、

「そうになってしまうのは、良心が弱くて、汚されるのです。」

と心の弱い人の葛藤を述べています。そこでパウロは、信仰の本質に迫って行きます。

8節に

「わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。」

と言っています。何が信仰の本質なのか、何時もその事を見極める力を求めて行かなければなりません。

「食べないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって何かを得るわけではありません。」

と言っています。問題の本質は、偶像に捧げた後の肉を食べる、食べないの問題ではないのです。

強い人たちは

『偶像なんて無いのだ。だから、捧げられた後のお下がりの肉だって、何も偶像に汚され

てなんかいない。だから、親戚や友人に、神殿の伴食に誘われたら、行ったら良い。』と言う知識を持ち、

『自分たちは、知識をもった自由人だ。』と自負していました。

その彼らに、パウロは、

『あなた達の愛の配慮の無い知識と自由が、弱い人たちを傷つけている事が問題なのだ』と論を進めていきます。9節に、

「ただ、あなたがたのこの自由な態度が、弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい。」

と注意を促しています。具体的に言うと、10節に、

「知識を持っているあなたが、偶像の神殿で食事の席に着いているのを、だれかが見ると、その人は弱いのに、その良心が強められて、偶像に供えられたものを、食べるようにならないだろうか。そうすると、あなたの知識によって、弱い人が滅びてしまいます。」

と、パウロは信仰が強いと自負して行動していた強い人たちに向かって、その大きな欠落に目を向けさせています。

さて、

『偶像なんていない。だから、供えられた肉をたべても、なにも汚れる事は無い。』

と信仰の強さを誇る人々は、神殿の伴食に参加して楽しんでいました。その同じ食堂に、信仰に入って間も無い人が、別の人から神殿の伴食に招かれて、後ろめたさを感じながらも、断るに断れず、やって来ました。心に葛藤を抱きながら、テーブルに着くと、向こうの方に、信仰の強い人の姿が見えるではありませんか。彼は途端に安心します。

『あの人だって、神殿の伴食に着いているのだから、何も心配することはないのだ。』

と、そこで、そのように、教育されるのです。それが、その弱い人にとっては、

『やっぱりこの生活が楽しい。キリスト信者になって、窮屈な思いをするよりも、昔の仲間と楽しくした方が楽で、良い。』

と言う事になって、信仰を捨てると言うことは、当時の状況から大いにあり得る事でした。

パウロは、その弱い魂が、どれ程大事な魂であるかと言うことに、心を止めています。

11節に、

「その兄弟のためにも、キリストが死んで下さったのです。」

と言っています。パウロはそして、自分の言動の間違いに気付こうとしない、強い人々に向かって、12節に、

「このように、あなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことなのです。」

と教えています。

強い人にとって、弱い人の行動は、『その人自身の問題であって、それが、何故わたしの責任になるのですか。』

と言うでしょう。パウロが言いたいのは、

『教会は、イエス・キリストの十字架の血が流され、皆、その愛を受けて、イエス・キリストの御救いに入れられた者の集まりで、キリストの身体の部分々々とされ、お互いに無くてはならない、決して関係が無いとは言えない、間柄に置かれている』

と言うことです。

その関係は、神の愛、キリストの愛で、結ばれて居る関係です。パウロは、1節で、

「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。」

と言っています。教会の土台は神の愛、キリストの愛で、何時もここに土台を置いて、物事を考え、判断して行かなければなりません。教会も現実的には、救われた罪人の集まりです。時に、意見の強い人が、自分の正論をかざして、皆を従わせようとします。しかし、その人の正論によって、どれだけの人が、傷ついているか分かりません。例えば、一昔前の事です。聖日厳守が盛んに叫ばれました。しかし、社会はどんどん複雑になって行き、日曜日に休みが取れない人も、多く出て来ました。やっと日曜日の休みが取れて、教会に行くと、正論を掲げる人が、

「もっと礼拝出席を励みなさい。」

と言います。言われた方は、その視線や雰囲気を感じて、行くのが嫌になり、信仰を止めてしまおうと言う事が起こるのです。

愛の配慮のない正論は、人を傷付けます。私たちは、自分では気付かないまま、多くの人を傷付けているのです。3節に、

「神を愛する人がいれば、その人は神に知られている。」

詳訳聖書では、

「すなわち、主との交わりと、愛を受けるに相応しい者と認められ、主は、その人を自分のものと言われるのです。」

と訳されています。神に知られていると言うことは、それ程、神様との交わりが愛の交わりとして深くなり、神様がその人を自分のものと、言っ下さる、そのような関係なのです。私たちが目指すところは、そのようなところ。そこに、互いへの愛の配慮が生まれ、信仰の成長が成されて行くのです。

私たちが、そのような教会を目指して行こうではありませんか。

お祈りを致します。

愛と憐れみに富み給う天の父なる神様

イエス・キリストの十字架の愛と、神様の赦しを頂きながら、自分の考えを正論として、人を従わせようとする、この大きな罪をお赦し下さい。

イエス様の愛の執り成しを何時も忘れる事無く、イエス様に倣うことを求め、全ての人を尊び、愛の配慮が出来る者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。

アーメン。